



CONTENTS



- 理事長挨拶
- 学術研究助成事業
 - ・近年助成した研究からご紹介



- 食文化の振興・啓発および協賛活動
 - ・令和元年度東日本大震災復興支援事業
 - ・活動紹介 NPO法人野馬土
 - ・浦上ランチプロジェクト(ラオスにおける学校給食プロジェクト)
 - ・読売写真ニュースを学校に寄贈
 - ・フードピア金沢を支援



- 広報活動
 - ・研究報告書の発行
 - ・財団ニュースの発行
 - ・編集後記

理事長挨拶

平成も終わり令和2年の新春を迎えました。昨年は何度も台風が襲来し、千葉県・東北はじめ東日本各地に河川の氾濫など多大な被害をもたらしました。

一方、外に目を向ければアメリカのトランプ大統領はアラブ圏を不安定にし、中国の習近平国家主席が、自国勢力拡大をはかり、香港、台湾に手を伸ばしています。日本にとって、安倍総理の外交手腕が問われます。

さて、今年は56年ぶりとなる東京オリンピック・パラリンピックが開催されます。しかし残念なことに私をはじめ多くの人々が楽しみにしていたマラソンは、止まる所を知らない温暖化による酷暑が懸念され、オリンピックのラストを盛り上げる華の競技でありながら会場が東京から札幌に変更されることとなりました。国立競技場が自宅からすぐ近くにあるため、出来上がっていく過程をずっと見守ってきた私にとって、7万人の大観衆に迎えられるマラソンのない国立競技場は、今一つ気の抜けたサイダーのように感じられます。

私共浦上食品・食文化振興財団は、ハウス食品グループ本社の安定した経営により配当金も

年々増え、学術研究助成事業、東日本大震災復興支援事業、そしてラオスにおける学校給食プロジェクト(浦上ランチプロジェクト)などの活動が充実しました。学術研究助成金事業は本年度で累計11億円を上回る実績となりました。

東日本大震災復興支援事業も令和元年度の贈呈式を1月16日仙台にて行いました。平成24年度からの支援総額は、約4千万円になります。

ラオスでの浦上ランチプロジェクトは、2012年より支援したポンサイ小学校の自立が近づいてきました。2月3日より私自身が現地へ赴き、建築中のキッチン・食堂完成のお披露目式の式典に参加し運動会やカレーランチを試食します。また、新たに支援するターケー郡ルアングアン小学校を視察してきます。成功事例であるポンサイ小学校を手本にしてどんどん浦上ランチプロジェクトが広がっていくことを私は願っています。私共もこれからも「継続は力なり」をモットーに地道に活動を充実させていこうと思っております。

日頃より当財団にご支援をいただいている皆様に心より御礼申し上げますとともに、今後ともよろしく願い申し上げます。



研究助成贈呈式での浦上節子理事長

主な活動紹介

学術研究助成事業

学術研究助成事業は財団設立以来の当財団のメインとなる活動のひとつです。研究テーマ1件当たり3百万円を限度とする助成金は各種食に関する研究助成の中でも高額にあたり、これは、設立当時の選考委員の助言で、少額を多くの人に配るよりまとまった額の助成の方が、より効果的な研究ができるとのアドバイスを受けてのことです。

ホームページや研究機関へのはがき等で広く応募者を募り、6月1日から7月10日の申請期間に207件の応募を受付けました。9月上旬、学識経験者で構成される選考委員会では今後の食品産業にとって重要な分野の研究や若手研究者の育成という視点に立ち、厳正な審査を経て研究助成19名の研究者への助成を決定しました。

贈呈式は10月27日にホテルニューオータニにて行われました。浦上理事長の「浦上財団の研究助成は設立当初から地方、若手、女性研究者に重点を置く

方針で選定してきました。今回も北は福島大学、南は沖縄科学技術大学院大学など全国より選定しました。皆さまのご活躍を期待しています。」との挨拶に続き、伏木選考委員会議長より選考経過の説明と研究者の方々への激励がありました。続いて各研究の代表者に理事長から目録が贈呈され、目録を手に各代表者から研究内容についてのスピーチがありました。

懇親会では打ち解けた雰囲気の中積極的な意見交換が行われました。おかげさまでこの34年間の助成件数は419件、助成金総額は11億3千万円を上回る実績となりました。

助成した研究の成果は、浦上財団研究報告書としてまとめられ、これまで26号まで発刊されています。今年度も27号を発行いたします。本活動を通じて、いささかでもわが国の食品産業及び食文化の発展と国民の食生活の向上、安定に寄与したいと念願しております。



贈呈書を手に研究者と理事長



懇親会で乾杯挨拶をする浦上博史副理事長



集合写真

～近年助成した研究からご紹介～

当財団が助成している研究の多くは学術的・専門的ですが、「食」は私たちの日常にも大きくかかわってきます。そこで2019年3月発行の浦上財団研究報告書Vol.26および今年3月発行のVol.27掲載の研究報告より2名の先生に研究の成果を解りやすく書き下ろしていただきました。

平成27(2015)年度助成

「ファイトケミカルはなぜ効くか？」

兵庫県立大学環境人間学部 村上 明



ポリフェノールに代表されるファイトケミカルは様々な健康効果を示すことで広く注目されています。しかし、これらがどのような仕組みで効くのか、実はよくわかっていません。ヒトを含む動物にとって、ファイトケミカルは実は異物です。事実、栄養素などは積極的に血中へ取り込まれますが、ファイトケミカルを摂取した際に機能するのは薬物や毒物と共通の解毒・代謝機構です。こうした「招かれざる客」が結果的に健康効果を示す謎に興味を持ち、今回の研究課題に取り組みさせて頂きました（「消化管で食品機能性を媒介する未知因子の解明」、2015年10月～2019年3月）。注目したのは「細胞外小胞（extracellular vesicles, EV）」です。EVは細胞から分泌される微細な小胞で、中には分泌細胞由来のRNA*や機能性タンパク質などが含まれます。そこで、EVがファイトケミカルの機能性を媒介しているという仮説を立てました。まだ研究は完結していませんが、現在、2つの可能性が見えてきています。一つは、ファイトケミカル処理した細胞から分泌されるEVでは機能性分子（たとえば抗炎症性を持つ熱ショックタンパク質群）の量が増加し、末梢組織での機能性発現に寄与する可能性。もう一つは、ファイトケミカル自体がEVに内包され末梢組織へ届くという新しい送達機構です。私が学生の頃は、「ポリフェノールは抗酸化性があるので様々な機能性を示す」という考え方がメジャーであったように記憶しますが、その後の研究進展によって、もっと複雑で謎に満ちていることがわかってきました。これらを解明することで、機能性食品研究の発展に貢献したいと考えています。

研究助成をいただきました浦上食品・食文化振興財団に心より感謝申し上げます。

<事務局注>

*リボ核酸ともいい、細胞の核や細胞質中に存在。DNAとともに遺伝やタンパク質合成を支配する。

平成29(2017)年度助成

「新規視床下部神経ペプチドによる新たな高カロリー食嗜好性の分子メカニズムの解明」

広島大学大学院 総合科学研究科 岩越 栄子



私達ヒトを含めた動物は一定の体重を維持するためのエネルギーホメオスタシスを有しています。しかし、高カロリー食はこのホメオスタシスの破綻を引き起こし、過食を生じさせることが知られています。飽食の現代社会においては、この高カロリー食への嗜好性の分子メカニズムの理解が、過食や肥満防止のために必要不可欠であると考え研究を行っています。

私達は、最近、鳥類や哺乳類の脳から、NPGLと命名した新規の分泌性小タンパク質を発見しました。今回ご支援いただいた研究では、哺乳類モデル動物のげっ歯類を用いて、NPGLの生理機能・作用機序の解析を行いました。その結果、NPGL投与により、高カロリー食を与えた場合でのみ摂食量が亢進し、脂肪組織の肥大化による体重増加がみられました。これは普通食ではみられません。加えて、肝臓において脂肪を取り込むだけでなく、糖質から脂肪を合成している可能性が示唆されました。本来、肝臓は脂肪を蓄積する器官ではないため、余剰の脂肪は肝臓から放出され、脂肪組織へ送られます。今回の実験で用いた高カロリー食は、脂肪だけでなく糖質を多く含んでいます。つまりNPGLは、摂取した脂肪だけでなく、体内で糖質から合成した脂肪を蓄積することにより、早期に肥満を惹起させることがわかりました。そもそも生物は、飢えをどう乗り切るかが生存の鍵となります。NPGLは、ありついた食べ物エネルギーとして効率よく体内に蓄積する機能を担う重要な物質であると思われます。この生物が獲得した効率のよいエネルギー貯蓄メカニズムを解明することにより、肥満防止に役立つと考えています。

研究助成をいただきました浦上食品・食文化振興財団に心より感謝申し上げます。

食文化の振興・啓発および協賛活動

***** ※ 東日本大震災復興支援事業 ※ *****

東日本大震災から9年近くが経ち、岩手県、宮城県、福島県それぞれの県で、復興に向けた地道な取組が行われてきました。昨年9月に実施した現地視察では、岩手県大槌町を訪問し支援対象者の成功事例、苦勞している事例などありのままを見せていただきましたが同じ9年近くでもその地域ごとで復興フェーズもニーズも変わり復興はまだまだの状況です。特に福島県のように地震と原発事故の被害や風評被害対策などの複合的な復興であり、各県ごとに必要な特にソフト面での支援のニーズは今後ますます必要とされています。

浦上財団は今年度までに延べ57件、約4千万円の支援をしてきました。今年度は昨年10月一カ月間の申請期間に27件の申請がありました。11月の選考委員会で今年度の支援団体11件を決定し、本年1月16日にホテルJALシティ仙台で贈呈式を行いました。「継続は力なり」で微力ではありますが、地域ごとのニーズを考慮ししっかりと寄り添いながら引き続き復興支援事業を続けてまいります。

また、浦上財団は、当財団自主事業の東日本大震災復興支援に加え、熊本地震や西日本豪雨災害により被害を被った方々に対し、公益法人協会の「草の根支援組織応援基金」を通じて支援させていただいております。さらに、昨年発生した台風19号で被害を受けた「NPO法人交流ステーションのみり」(当財団が過去に支援)への支援もさせていただきました。



1月 仙台での贈呈式にて支援活動テーマを発表する支援団体担当者

活動紹介

特定非営利活動法人

の野馬土



●平成28～30(2016～18)年度支援

私どもは福島県浜通り地方で震災による被害を受けた農家を中心となり、地域のために立ち上がったNPO法人です。食品の放射能測定など福島県の農産物の安全性を追及する取り組みと並行して、地域の方の交流企画や、福島の現状をお伝えする視察ツアーの実施を続けてまいりました。

平成28年度に軽食提供に留まっていた農民カフェの「拡充計画」にご支援いただき、水道、機材など厨房内の条件を整え、「一般食堂」として許認可を取得。福島自慢のお米をはじめ、産直野菜や名産品を活用したランチメニューの提供を開始。20～30名様のご団体様貸切にも対応が可能になり、福島食材の魅力を直接お伝えできるようになりました。翌29年度には被災後の福島を背景に、農業や食の大切さを知ってもらう試みに注力。食べ物の大切さをテーマ



野馬土 cafe の野菜たっぷりメニュー

にした動画・冊子製作、首都圏の催事にてPR出展や地元の子供たちと農業体験企画も実施。本年30年度は実際に食べる、作る実体験を重視。作ったものを家庭に持ち帰って食卓で体験をシェアしてもらい、その場限りで終わらない食育への取り組みを目指しました。昨年末にはもちつき体験を実施。白と杵でつきあげたおもちは大好評で貴重な体験を喜んでいただきました。さらには視察ツアーの団体様向けに福島食材の特製弁当の提供と直売所でのお惣菜販売も開始。3年間継続して助成いただけたことにより、確実にステップアップを遂げました。ひとえに財団のみなさまのご理解とご支援のおかげと心より感謝申し上げます。蒔いた種を大きく育て、花や実がつくまで、福島という場所だからこそ「食べることは生きること」を大切に伝える活動に邁進してまいります。





■ 浦上ランチプロジェクト(ラオスにおける学校給食プロジェクト)

ラオスは東南アジアの後発発展途上国の一つです。浦上財団は2012年度から就学率向上や子供たちの学力・体格の向上、お母さん方の栄養知識の向上を目指し、委託事業として自立型学校給食モデル事業を開始しました。この事業は将来的には自らの力で学校給食が継続できることを目標にしています。プロジェクト開始後8年が経過し、これまでに、ポンサイ小学校、ハドシェンジー小学校、ハドシェンジー中学校、ケムアン中学校4校に対し支援を行ってきましたが、2018年度は、ポンサイ小学校以外の小中学校については、今後の自主運営を期待し支援を終了しました。同年度はラオス事務所に日本人スタッフが常駐している一般財団法人WORLDS LINKとともにポンサイ小学校を重点的に支援し、2019年度から当財団の“自立を協力する”という支援理念を理解してくれた小学校2校(カムアン県ノンパン小学校、ルアングアン小学校)でもスタートしました。これまでの成功・失敗経験を踏まえ、この新規2校もポンサイ小学校のように自立目指して頑張っていきたいと思えます。



ランチを食べる子供たち

ポンサイ村では、乾季の時期に全く雨が降らないうえ、井戸水も岩塩を含むため農業用水として使うことができず、乾季終盤の3ヶ月は農業事業を行うことができませんでした。そこで、在ラオス日本国大使館が行っている小規模無償援助に要請を行い、ポンサイ小学校内にあるため池を、8m×22mから25m×70mに拡張する工事を行っていただきました。このことにより、乾季の時期の農業用水が確保され、魚の養殖などにも活用できるようになりました。

また、村人や教師への農業研修を通じて村全体の農業スキルを向上させたことも浦上ランチプロジェクトの成果の一つかと思えます。しかし最も大きな成果はこのランチプロジェクトを協力しながら実施することによって醸成された村人たちの自主性、助け合いの精神などの意識改革で、村人たち自身がこの意識改革を最も素晴らしい成果と言っていることをとても喜ばしく思うとともに、自立に向けて大い

に役立っています。

今後は、ポンサイ小学校の成功事例をマニュアル本(成功への道しるべ)として作成し、ラオス教育スポーツ省を通じラオス全土の小学校に配布してまいります。また、本年2月には、自立のめどが立ったポンサイ小学校に、浦上理事長、ハウス食品グループ本社CSR大塚部長、大豆生田常務理事、浦上事業部長が訪問し、建設中のキッチン、食堂完成のお披露目の式典に参加してまいります。さらに、そのあとに行われる運動会、カレーランチの試食会も行う予定ですし、新たな支援校2校のうち1校についても訪問を予定しています。引き続き、在ラオス日本国大使館の灌漑施設等への小規模無償援助協力、JICAラオス事務所が実施している農業技術普及協力の小規模無償援助協力など、様々な人たちとの連携を推進し着実に一歩ずつではありますが浦上ランチプロジェクトの成功に向け官民共働でプロジェクトを実施してまいります。



ランチを調理するボランティアのお母さん方



建設中のキッチン

食文化の振興・啓発および協賛活動

読売写真ニュースを学校に寄贈

浦上財団の標語『「食」は「人」に「良」いこと、元気のもと』をパネルに用い、「食育活動」に熱心に取り組んでいる小学校を軸に48の中学校、高校、図書館に教材資料として毎週写真ニュースを提供しています。設置小学校等からは児童生徒たちの関心がとても高いこと、学校教育にとっても有効であることなどから引き続き提供願いたいとの要望が寄せられています。



小学校等に寄贈しているパネルの一例

- 最新情報が写真でわかりやすく生徒たちへニュースに対する意識を高める資料となっております。
- 「読売写真ニュース」は事件や問題だけでなく、喜ばしいことも含めた時事を写真で示し、分かりやすく解説してくれるので、本校生徒にとって格好の教材です。そのおかげもあり、毎年ニュース検定にも積極的に取り組ませておりますが、今年度は準2級受験者を輩出できました。
- 児童・職員並びに学校を訪れた保護者や地域の方々も興味深く立ち止まり、ニュースが掲示されるのを楽しみにしています。様々な情報を売ることで広く社会への関心を高めることにつながり児童の発展的な学習にも生かされています。

寄贈校からの声

フードピア金沢を支援

独自の食文化と石川県の冬の日本海の海の幸・加賀野菜を紹介する食のイベント「フードピア金沢」は毎年2月に金沢市及びその周辺地域で開催され、今年は34回目でした。当財団は第1回(1985年)より支援しています。

北陸新幹線の開通により、首都圏からのアクセスが便利になりました。従来の金澤老舗よもやま話(伝統的な老舗文化を市民等に伝え、地域社会に貢献することを目的)などに加え金沢の町屋“食”めぐり(風情ある町屋の中で食を楽しみ金沢の魅力を再発見)など新しいプログラムを開始するなど、残したい古い伝統は守り新しいものを加えていく金沢らしいイベントとして発展しています。



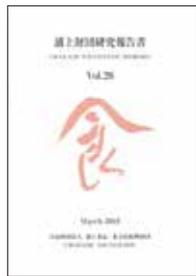
万寿貝と水だこの石焼き

広報活動

研究報告書の発行

助成した研究のうち一昨年秋までに報告をいただいた13件を浦上財団研究報告書Vol.26にまとめ昨年3月に発行し、全国の研究機関附属図書館や都道府県立図書館にお送りしました。

また、昨年の秋までに当財団に提出された研究報告を収めた研究報告書Vol.27を今年3月に発行する予定です。



財団HPのリニューアル・財団リーフレットの配布、財団ニュースの発行

研究助成事業や復興支援事業の告知、申請や結果発表をはじめ、当財団の活動をHPにてお知らせしております。また2015年度より研究助成事業と震災復興支援の申請をオンライン申請にし、助成対象者との連絡の利便性を高めるためマイページでのやり取りに変更しました。

他にも財団の事業活動や寄付金の募集活動などを紹介したリーフレットや写真を多く使って1月にその年度の活動をまとめた財団ニュースを発行しております。



編集後記

当財団のメイン事業である学術研究助成事業を通じ社会貢献の一翼を担える喜びを感じています。また、東南アジアの最貧国ラオス人民共和国でのラオスのランチプロジェクトの推進ですが、このプロジェクトの特徴の一つに、現金支出をできるだけ軽減するプログラムがあり、学校給食用の野菜・魚類を校庭の一部を活用して自ら育てています。地域に優れたリーダーがあり、子供たちへの給食の重要性を理解している村であっても、厳しい雨季や乾季と闘いながら収穫を確保するのは難しく、その熱意を

サポートする支援や知識の必要性を感じていますが、何とか自立のめどが立ってまいりました。さらに、同じことが復興支援にも当てはまります。本年も熱意ある人たちとの連携を密にし、浦上理事長はじめ役員の皆様のご指導をしっかりと受け止め、誠意、創意、熱意をもってこれからも頑張ってまいります。

(大豆生田 清志：浦上 佳江：戸田 俊一)



〈お問い合わせは下記まで〉

公益財団法人 浦上食品・食文化振興財団

〒102-8560 東京都千代田区紀尾井町6番3号 ハウス食品グループ本社ビル

電話：050-3532-6365 FAX：03-3264-6188

URL: <http://www.urakamizaidan.or.jp> (お問い合わせはHPのお問い合わせフォームをご利用ください)

